

## 【傍若無人(ぼうじゃくぶじん)】

史記列伝中、秦王政(後に始皇帝となった人)を討とうとして失敗した壮士、荊軻(ケイカ)の伝記中に見える言葉です。筑の名手である友人、高漸離の伴奏に合わせて荊軻が燕京の町中で、歌ったり泣いたりしたその有様を「傍(かたわら)に人無きが若(ごと)し」と表現しています。

つまり、周囲に人がいても、それに全く気を使わないので、これを「人がいないのと同じようだ」と実現したものです。

「人前をはばからずに、勝手気ままにふるまう」ことから、「人を人とも思わぬ無礼な態度、言動」を言うようになりました。

ところで、民主主義の時代になったというのに、逆に、傍若無人のふるまいをする人が多く目につくようになりました“自由”を誤解して“放縦”になったためだと思います。電車の中で大声で話す人、大声で笑う人、歌を歌う人、大きな口をあけてあくびをする人、鼻の穴を掘る人、これらはすべて傍若無人のふるまいと言うことができます。

これは“自由”と“放縦”の履き違いに因ることですが、換言すれば、他人の気持まで思いやるだけの余裕がないという事であり、肉体ばかり大きくなって、心の生長がこれに伴わないことを示すものです。衣食は昔以上良くなったというのに「礼節を知らない」とはどうした事でしょう。

さて、“若”という字は、艹(草)とナ(手)と口とて作られた字で、説文(最古の漢字解説書)には「菜を擇(えら)び採ること」とあります。しかし、私は「摘んで(ナ)食べる(口)菜そのもの」を表わした字と考えてよいのではないかと考えています。

今は普通、“わかい”という意味の字として使われていますが、これは“弱”という字と発音が同じため、“弱輩”“弱冠”(二十歳のこと)を“若輩”“若冠”と書いて代用したことに始まります。

「春の野に若菜摘む」という歌がありますが、実は“若”という字に“菜”という意味も、“摘む”という意味もあり、そういう使い方をされたこともあったのです。おもしろいものですね。

“傍若無人”の“若”は、“如(ごとし)”の意味に使われていますが、これも若の発音と如の発音と似ているために代用されたものです。また、同じ理由で“汝(なんじ)”の意味にも使われることがあります。

“無”という字は、無(ブ)と灬(火の別字体)との合字で、前者が発音を、後者が意味を表わしています。「火は、物を焼き尽して跡形もないようにしてしまう」という事から、物の“なくなる”こと、“ない”という意味を表わしたものです。

無の無は、“舞踏”の舞の無と同じもので、ブという発音を表わした音符です。舛は両足をそろえた形で、舞を舞おうとして足をそろえたことを表わしたものです。